074824-000-9

特67-409

猿若座新狂言筋書

水島　庄之助／刊

M15

CEK-0161

一番目狂言 **黑白論織分博多** 五幕

（序幕）筑紫橋口天神の場、同別當安陽寺の場、博多廓花菱屋の場、廓外八丁縄手の場、（二幕目）白洲紅養拷問の場、大野村狩人内の場、（三幕目）浦橋住居の場、筑紫浮殿の場、城外松原の場、（四幕目）淺川主水切腹の場、佐屋形山茸狩の場、同山上只村殺しの場（大詰）殿中對決の場

烏山 大膳	市川團十郎	主水妻お貞	坂東しう調
狩人彌平次	仝	お秀の方	岩井紫若
浦橋重太夫	市川左團次	茶道珍阿彌	中村鶴蔵
星野東衛門	仝	千川郷蔵	市川團蔵門
大領 貞行	市川海老蔵	奥女中岩浪	坂東喜知六
安陽寺紅養	市川右團次	門番 李助	市川猿十郎
淺川主水	仝	中老ゝは崎	岩井しげ松

二番目狂言 **偽甲當世籠** 三幕

（序幕）淺草奥山茶店の場、同富士見二階の場、大川端置場の場（中幕）陸尺長屋京屋の場、濱町川岸富士見渡の場（大切）籠甲屋店前の場、幸次内の場、籠甲屋店の場、淺草橋の場

長房 幸次	尾上菊五郎	京屋久平次	中村仲蔵
地獄れかね	仝	娘おうら	澤村源之助
下女おかん	坂東しう調	半目長五郎	市川左團次
馬頭忠	市川海老蔵	女房おりま	市川團蔵門
甥眼九郎	尾上松助	京屋新三郎	坂東家橘

中幕 浄るり **色成楓夕榮**（上下）中村芝翫 中村福助 坂東家橘

大切 歌舞伎十八番の内矢の根五郎 市川團十郎

明治十五年十一月廿日御屆
同 廿日發兌 京橋區入船町三丁目一番地
編輯兼出版人 水島庄之助
發賣元 本郷區元町一丁目三十六番地 藤長八

○一番目筋書

（序幕）筑前橋口天神の場、本舞臺上手石の鳥居同じく玉垣向ふ本社の遊見所々よ梅の盛り爰よ（新相中二八）寺男よて掃除をしてゐる此そなよ（新相中二八）參詣の仕出しにて立掛ヲ居て（仕出）此樣よ綺麗よ掃除をあさるゝどう云ふわけだと問ふ（寺男）けうい御領主菊地樣が御參詣かたゝの梅見ゆゑそれで掃除をとるといふ（仕出）其綺麗でおもひ出したが此別當の安養寺のお小性要人さんゝ女よしても見たい程ゆゑよい容貌ゆゑお住持の紅養さま寵愛あさるも無理ゝないと此樣あ臺詞よろゝく渡り（寺男）ドリヤ掃除をしまつさら部家へ往て休まふ（仕出）私も參詣をゝてこやうとト四人とも鳥居のうちへはひる向より（四右衛門）千川郷蔵上下大小あとより（荒次郎）船大工の棟梁作造よて中間ついて出で來り花道よて呼かゝ舞臺床机へ掛り（荒）千川樣只今お邸へまゐつた處でムり升る（荒）其方ん用事ゝ彼大船御造營の事か（荒）如何よも左樣でムりませト是よて郷蔵ゝ中間を別當へ使ひよやり遣ざけ（だん）是ふて誰も聞者ゝあいト是より今度我羽の思し立にて一万石積の大船を築造遊ゆすとの御沙汰夫よ附て奉行職を御意よ入の浦橋重太夫どのへ仰つけられ則ち下役ゝ此郷蔵其御用を其方へヲ付けるも魚心あれゞ水心といふ（荒）イヤもふ是まで百石千石の船ゝ製へた事ゝありますが世よまれゝ一万石積この役用を私しへ仰つけられ下されますなら受負高の二割をばあた方へ差あげませうから何卒お執成をなすつて役用を仰せつけられて下さりませト頼む（だん）二割の禮あら浦橋氏へ執成て遣ゝさんト此筋あつて（荒）イヤ夫あつき一ッ困る事かゞさゝ升（だん）何困る事とゝ（荒）これまで手掛ぬ大船の普請折角拵へあげても船足でも遲くてゝ何よもならず斯いふ大船よゝ古實の畫圖ゲなければ出來ませぬ（だん）イヤ其圖面あら安心いたせ同藩淺川主水ゝ軍學の古實者ゆゑ君より大船の繪圖面引てんざせと兼ての仰沙汰（荒）八

ヤセウ然いふ給圖タありさへそれを譚のないことト此筋
ゐつて爰へ足輕出で只今この處へ殿様のお入ゑ仏りまする
(だん)最早お入とあれば其方い此場を(荒)トリヤで遣
慮致ませうト荒次郎下手へ遣入る跡(だん)イデお出迎ひ
ト鳴ものゑなる向ふより(海老藏)太領貞行袴羽織大守の
こしらへ跡より近習(小圖次、さい助、門兵衛、音扇)上下
大小にて小性刀を持ち附そひ出で來り花道にて(海老)梅
の咲たを讃する蛮詞あつて皆々舞臺へ來り床机へかゝる
(だん)君ゑい今日當社へ参詣それゑ付き先日より彼大
船造營ゑ付き入用の畫圖面を淺川主水ゑ差上べきや
う笠原隼人を以て仰せつけられしが未ざ返答いヤあげ
ませぬか(海)イヤ其義い我供さきへ隼人より返答致を筈
哉やト爰へ向ふより(門藏)笠原隼人上下大小ゑて出で來
り(門)只今お館へ出仕いたせーに最早これへお入とき、
参上仕つて仏りまと(海)オト隼人待兼しぞシテ主水い
承引いゑーたか(門)はハット仕打あつてこれか門藏い兼
て拙者もお諫ヤせし如く今度の大船ご造營いこれまで大
小名の家招ゐつて五百石千石積い例あれど一万石積とい
稀れゑして私ーゑ大船を製造なそい天下の制禁のなら也
お上のお祟あるい目の當りそれゆゑ主水い醫師君の命ゑ
せよ畫圖面い引かれぬと理非明白ゑ再三の辭退某ーも兼
てよりご諫言ヤい爰の處此義い平ゑおと、まり遊ゑすか
左あくゞ當時長崎ゑ在勤老職鳥山大膳どのへご相談あつ
て然るべート宜くいさめる海老藏憤として(海)ソリヤ主
水ゑい予が詞を用ひぬが(門)用ぬゑはあらざれどもお家
の爲をおもへばこそ此義い何卒おとゞまり下されませう
(海)ヤア憎つき淺川ど是より海老藏は我日本い廻り海ゑ
して軍船あくてゑ弘安の蒙古の如き事不意ゑ起ば防ぎが
たし夫を憂て將軍家の手をからず國の爲めゑ製造ゐそを
上にてお咎めあればとてお此あらんや(だん)コリヤ我君
のお詞を背くは失禮と是より近習四人へせりふ渡り憎く
き主水めと口々ゑいひのゝしる門藏こゐしあつて(門)た

ゞ此上い鳥山氏をめされて萬事御相談をこそ願しけれと
いふ(海)ヤア後といひ主水といひ奇怪しごくなヤ分(門)
アイヤ譬へお詞そむくともお諫め入るい臣下の道(海)ヤ
ア臣下の道を守ら必なせ予が心ゑ逆ちひしど(門)サアそ
れい(海)サア(両人)サア〈〈〈〈ト門藏グットつま
り下手へ去ほ〈〈と〜て是非あき次第ゑて扣へる爰へ向
かふより(紫)小性要人ふり紬袴ゑて梅の折り枝をもち跡
より(猿十郎)門番奈助付いて出て來たり花道ゑて最早ゐ
領主様の御參詣と見へる(紫若)そさうなさやう奈助殿い
蔭へ隠れてゆかつーやいト猿十郎一寸小がくれする紫若
下手へ來り平伏する海老藏見て(海)コリヤ〈〈郷藏アノ
者い何れれ者ぢや(だん)彼い當社の別當安養寺ゑ仕ます
る小性要人とヤもの(海)さてい兼ゃ聞き及ぶ美少年かト
海老藏美ーいと暫見とれる思ひ入あつてシテ〈〈其方が
持てをるい梅の花ぢやゐ(紫)ハッお受致とい恐れ入ど此
梅の一枝ころ師の坊ゲヤ付ゑて床の花入へ挿おきて君へ
ゐ覽ゑ入ンとどんぜしゑお目ゑとまつて恐れ入ます早速
御の花ど取かへるでムりませふト云ふ海老藏始終見とれ
る仕打あつて(海)イヤ〈〈折角のたしなみ其梅ゑて苦く
あいシテ其方い何才じや紫十七歳ゑムりまする(海)左様
かトとつと思ひ入圖右衛門仕打あつて(だん)我君にいあ
れなる要人をば執心ゑござりまするか(海)サヽト両人ゑ
ろし〈仕打紫若い心づかず(紫)左やうなれど我君様御待
うゐをいたしまそるト一禮して立上る以前の奈助の(猿
十郎)さてい御領主様にいどうやらお前ゑトいふを思入
して(紫)お先へ〜めん下さりませふト紫若猿十郎付て鳥
居の内へはひる海老藏跡をみおくりをとれる仕打圖右衛
門偖いそれはどゑ御執心かといふ思入ゑて(だん)御前さ
ま〈〈左ほどまで(海)意ゑ入バ紅猿より御所望あそゞ〜要
人をお傍へ(海)偖遊ばせ(海)世ゑ稀ひなき彼が器量郷藏其
方より紅猿べ所望いた〜て予が小性ゑ致せ(だん)夫いい
とよりやすき事ト両人思いれあつて(だん)最早時刻ゐう

つりまそれば我君まハ御參詣(皆々)然るべし(門)拙者もお供と立かゝるを(だん)アイヤ貴殿ハ殿の御不興うけれバお供ハかなはぬ(海)扣ゑよ(門)スリヤかをゞまでトしつと思ひ入ゐつて海老蔵先よだん右衛門相中四人小性ついて鳥居の内へはいる跡よ門蔵手をこまぬきよろしく思ひ入ゐつて(門)諫言耳よ逆ふの道理此度の大船御造營ハ容易おらざるお家の大事それゆゑ淺川氏もろともにお諫めヤすを聞き入さまハ也以の外なるお憤ほり是りや片時も捨おゝがたし長崎表ハ鳥山殿へ書狀に認め御歸國めるやうヤおくらぬを相おらぬ此模樣よろ〳〵く道具廻る

(別當安養寺廣間の場)本舞臺向ふ床の間續て金襖上下杉戸洒て廣間の道具爰よ所化三人褥曲禄を直ー居て御領主さまの御參詣で御丼禮がをめば最早これへおなりで有らうト此樣なる臺詞ゐつて所化下手へ道入爰へ向ふより以前の貞行(海老蔵)千川郷蔵(だん右衛門)近習小性附添出る(海)當住職ハ數奇者と聞きしゞ間毎よ珍書の飾り感心ーたト皆々舞臺へ來り住ふ爰へ奥より以前の要人(紫若)振袖袴よて帛紗へ茶碗を乘持て出で(紫)不手前の鹿茶一服召あがり下されませう(海)オ、そちゞ手前とわれハ格別じやト仕打ゐつて茶を呑む(だん)ヱテ當寺の住職紅葉ハ如何めされたト此時奥よて只今御前へト合方になり奥より(右四次)緋の衣七條袈裟紅葉上人よて出來り下手へ平伏して(右)コレハ〳〵大領よハ能こそ御參詣下されましたトよろしく渡四右衛門ハ近習に目配せして目錄つゝみを白木の臺よ乘せ右四次の前よ置く(だん)此目錄ハ君より賜りもの頂戴あれトいふ(右)ハヽト禮を述べ鹿酒一献要人支度よくゞ奉つらんといふ(紫)ハ立んとするを(だん)アイヤお住持お待下され(右)そりや何故よト聞く是より(だん)ハ紅葉よ所望したきものがあるといふ(右)ハ我君の沙所望とハ何かと問ふ(海老)ハ貴僧ゞ小性の要人をヤ受けたい(右)何要人をご所望とあるト惚ゞおもひ入(だん)お傍子性よさしあげられよといふ(右)ハ思ひ入れあつて要人ハ我君の御意の通りにハ參らぬといふ(海)そりやまゝ何故よ予ゞ所望通り參らぬと問ふ(右)ハ折角沙懇望遊ゝをお詞背くハ恐れ入と是なる要人が身乃薄命をヤ上ンと仕打ありて右四次ハ元要人の父ハ當國近在の農民あるが彼が三歳の折父母とも仔細あつて非業あ最期是ゞ宿世の因果ゆゑ父母の菩提のため出家させしと餘儀あゝ頼み近々出家得度させるなれゞ此儀ハ宿免を願ふといふ(紫)も供ゞ沙免を願ふ(だん)近習とも沙家來よおつて食祿をたまはらバドンな供奉も出來るから是非おうけせよといふ(紫)何うしてもお受ハ出來ぬとことはる(海)ハむつと〳〵く斯まで懇望しても出家得度が去たしとい共身の誤りといふ(右、紫)ハ出家よなるが何ゆゑ誤まりでムりますトとふ(海)ハ出家となれハ女犯をゆまーめあれゞ子孫の出來る筈なければ其身ゞ死ンざる跡にて忽地無縁とあるハ必定夫よりハ予が臣とあらゞ心妻を迎へて一子を儲け家名を立る先祖へ孝行只出家よありたいといふ忠孝二ッ全たきもれであんぞといふ(右)そろハを凡俗の上の事父母が後世の苦忠を救ふを佛門のおふひト此筋の蜜詞ゐるトゞ(海老蔵)を望を聞さといふ(右、紫)喜び過言の段ハごめん下されませうト詫る(海)を始終(紫)よ心の殘る仕打此とき時計なる(右)神前よて讀經あさんと(紫)を目錄蜜を持ち兩人下手襖の内へは入(海)を(紫)を見送り思ひ入(だん)を前より(紫)よ目を注る仕打ゐり此時傍をうかゞひ小壁よて要人を女おらんといふ(海)もおゞろく(だん)を兼て要人を女ならんと市中よて風説をれゞ只今彼が立舉動を見るに正〳〵く女ならんとハふ近習小性もこりや御鑒定の通りよ相違な〳〵といふ(海)立腹してさては女ゆゑ予が所望よ應ぜざるゞ憎くき賣僧メト是より(だん)ゞ跡よのこり賣否を探りヤあげんといふ(海)は吉左右を相待ぞと近習を連向ふへ這入(だん)は小蔭へのくれる爰へ以前乃(紫)要人出で領主よ懇望されひよんあ事よおつたナアト爰へ奥より李助(猿十郎)出でこれの

らお前の親公彌平次さまの家まで旦那さまのお使ひで行ト思ひいれありて這入る(紫)も行うとする爰へ門右衛門出で我慢を云ふ殿の御意ゑ隨へといふ(紫)は斷り行のうとそるを(だん)抱とめ實は已が惚たと色合の臺詞ある(紫)は貴方までかト通ンとするこの立廻りのうち(だん)と(紫)の懷中へ手を入れ(だん)ヤ此乳房ハ(紫)エヽト驚くり〜て其手を振はらひ奥へ入跡ゑ(だん)色ゑ事よせ懷ろへ手を入しゑ案ゑ遊はぬアノ乳房さてこそ要人は女で有たかトこのもやうよろし道具廻る

(博多廓花菱屋の場)本舞臺博多廓花菱屋小女郎座敷の場

爰ゑ(荒)ゐ作造物持のこーらへよて居る(秀調)の小女郎傾城の形遣手離妓(相中三人)居あらひ酒盛の体(荒)ゑ小女郎を口説てもビンシャン〜と靡かぬハアノ主水といふ毛虫がある爲だゲアンナ者ハ思ひきり己のいふ事ゑ隨へとんふ(秀)ハどの樣ゑ云しやんしても勤はすれど心の紐は解かぬのらいやじやといふ(荒)ハそんなら是非とも身受して自由ゑそるがそれともいやか今ゑ已は出世して其方に喜こいせるのだ(秀)比喩あんといはしやんゑても他へ身受をされてもこ世と言交した主水さまへ濟ぬからさう思ふて下さんせといふ(荒)さう強情ぬのいやれと立ての、る(相中)とめる何さま素直でゆかぬは色の道あひくやうに其方衆からもそ、めてくれろと(荒)は座敷をこのへて飲直さうと皆々を連れ奥へ入る跡に(秀)殘ゑ手詰ゑあつて作藏面ゲ身受そるとんふが氣ゑかゝるはやふ主水さまゑ逢ひ度ものじやナアト思案の仕打此時合方ゑあり向ふより(右圓次)の淺川主水羽織着流し好ゑの形ゑて出る(秀)見てヨゝお前ゑ主水さまよう來て下さんーたト是ゑり作造ゲ身受そるといつて居る事を詰す(右)もおどろ化二世と交しゑ其方をば他へはやれぬ是非某が身受いたす併し其方を身受の金ゑ何をいふゑも大枚三百兩今どいつて差あたり工夫仕樣もあいと嘆息そる此前より(鶴藏)の茶道松下珍阿彌動靜をうのゑふ此時ズット出で(鶴)イヤ其金ハ拙者ゲお貸ヤませう(右、秀)思ひがけなき此方は紛坊主珍阿彌ゑの儲ハ子細を(鶴)サア聞いたでもなし聞かぬでもなけれど若いうちゑは誰しもありうち幸ひ今日無盡ゑ當り所持いたしゑる三百兩これを貴殿に貸ませうと懷中より三百兩を出し主水の前に置く(右、秀)ハ喜こび然らば暫時拜借いたすと是にて亭主を呼び小女郎の身受をそゑ(右)はあれまで格別厚誼もなき貴殿ゲ大金ゑ貸て下されーハ何か樣子ゲと(鶴)ゑ聞く(鶴)は如何ゑも此金主ゑ他ゑあり只今お合せヤませうト立ノ、る此時奥より(左圓次)の倉橋重太夫出る(右)は驚き仕打ある(鶴)は今身受の金を貸て下されたハ倉橋樣ゲといふ爰にて(左圓次)は(右)に過日笠原隼人より申したる一方石積の船の繪圖を引てくれよとんふ(右)ハ金と借りたる恩人の頼ゑあれど大船を製造は天下の法度あれば浮家のおためを思ひ繪圖ハ引かれぬとんふ(左)はそのお爲ゆゑ貴公ゑ繪圖を引せそれを以て殿ゑ諫言をする積りだト是より其實らしく(右)ゑ說くトゞ(右)ハ重太夫に欺むかれ承諾そるこれゑて(左)は安堵ー(右)ハ(秀)を連れ奥へ這入跡(左、鶴)顔見合ゑつこり笑ふ爰へ(荒)の作造出て田舍客とゐり小女郎を身受するといつたもゑ首尾能三百兩にて繪面を引く事ゑあつさと喜び笑ふ所ゑて道具廻る

(安養寺紅養居間の場)道具渾て紅養居間の体爰ゑ(紫)の要人居て今日大守ゑ見染られし臺詞ありて案ゑる仕打爰へ(猿十郎)の門番前の体ゑて出で(紫)ゑ今お前の親公彌平次どの、所へ往たと此筋を往て奥へ入る跡へ(右圓次)の紅養出で和女が爰ゑ居ては爲めゑならぬのら一先在所へ歸れといふ(紫)は貴公のお身が案じられるゆゑ歸らぬと爭さふ爰へ(圓十郎)の只村彌平次獵人好ゑの形ゑて向ふより來る(右)は要人を寺ゑ泣く事は出來ぬから連歸つて隱ゑて呉よといふ(圓)は連歸るは承知あれど貧乏人ゆゑ苞ゑ方ゑ困ると此筋の臺詞渡り(右)は五十兩を彌平次ゑやる是ゑて(圓)は無理ゑ泣入る要人を連れ裏口より落

行ント柴垣の蔭へはいる(右)と跡を見送り安心したといふ仕打あつて(右)事ふよつたらト木の頭(右)傘サ一本ト是よて道具廻る

(博多郎外八丁縄手の場)道具平舞臺ふ渾て縄手道の体爰、ふ四手駕一挺休ふ駕丁(相中)二人跡の駕ハ何うしたか餘り遅いから見て来やうと駕の中の客ふこの臺詞を往て上手へはいる此時駕の垂れをあげ(左團次)の重太夫出で月がハ、から歩行て行うと行ゥゝる爰へ(團)の彌平次前の形荷物を背負ひ(紫)の要人の手を引き出る此時火入の月かくれるこれより三人の世話暗闘とありトゞ(左)は密書を遣そ(團)はこれを拾ふ爰ふて見得よく幕

(二幕目)紅蓑拷問の場　本舞臺二重渾て菊地家白書院庭先の体幕明と(相中)の諸士二人今日ハ倉橋様が安養寺を詮義あさる、筈ふと此様ふ筋渡る爰へ(左團次)の重太夫上下好みの体ふて出紅蓑を喚出せといふ爰へ(右)の紅蓑緋の衣好みの住職のこゝらへふて向ふより出來ア花道ふて倉橋と一寸臺詞渡り本舞臺へ來て二重へ居るこれより(左)の重太夫ハ要人れ事を調べ寺法宗旨ふどの掛合もあり(左)は返答ふ詰りこれにて女犯の罪をいひ事あち立ていハ爲にならぬゆゑ夫よりと要人を殿へ差あげよといふ(右)は決して女犯でおいといふ(左)は然ちば証據人を見せんと爰へ(だん)の郷藏を喚出す(だん)ハ色に事よせ要人を捕へ懐ろへ手と入れ改めしふまさしく乳房ハ女の乳房(右)ニ(だん)サ何と是でも違らかうか(右)乳ハ如何ゥ愚僧とても肌に手をだふ觸ざれバ女なりしゥ知らぬといふ(左)はこれふて憤ア斯まで証據を以て取糾すふ知らぬといふハ強情坊主この上は火水の責ふかけ吐させて見るト(右)を庭へ蹴落す此とき(右)の懐中より短刀落る(右)ハ南無さんとかけ寄るを(だん)引と、め縄かゝる(左)ハ短刀をあらため(左)コリヤこれ紛ふ方なき大友家の重寶ありさてハ紅蓑こそ當菊地家ふ亡され〜大友の餘類ふて違り去ふナ旁々もつて捨れかれずソレ拷問めされ(だん)

恐得たト是よりはげしく拷問をる是ふてトゞ(右)は氣絶する爰へ向ふより(猿十郎)の門番杢助出で要人どの、事ハお住持ふ代り私しが申上げますから何うか紅蓑様の命をお助なされて下さりませといふ(左)は要人ゲ女といふ事を眞直ふ白状〜さあら紅蓑の命を助けてやろといふ(猿)は喜こび賞ハアノ要人は只村彌平次の娘れ秀といふものなりと白状をる(左、だん)も駭くこれふて紅蓑ふ藥をあたへ蘇生さを(右)ハ思を吹かへ〜(左)ハまた紅蓑ふ白状せよといふ(右)ハ如何やうふ責られても知らぬといふ是ふて(左)ハ今門番の杢助が白状ふたりといふこれふて(右)ハ少ふ駭く爰へ(だん)の郷藏出でさて〜滝といふ賞僧メ此うへハ脅を斷わり鉛の熱湯を灌ぎ拷問致〜てくれんと(右)を引立る(右)は菊地家を恨ひの筋ありてこの見得よろして道具廻る

(大野村狩人内の場)本舞臺二重荒家渾て彌平次内の体なり幕あくと(相中)二三人狩人山戻りの姿にて茶を呑み居

る(紫若)の要人郷か秀世話娘振袖あらび居る狩人ハ安蘐寺のお住持が貴殺された事乃話をして各自上手へはいる(紫)も此事を聞き歎く爰へ(圓十郎)の彌平次出で倶々菊地貞行の苛政事を語るこのとき薄ドロよなり紅裝の怨念お秀にのりうつる仕打これよりお秀ハ紅裝の氣色にて菊地の家よ仇せんと語る(圓)も同意してこの節の盞詞渡りありト、紅裝の怨念ハ立去るこの時(だん右衛門)の郷藏組子を連れ召捕に來る(圓)の彌平次ハ郷藏ゑ悪口するこれよて一寸立廻りある爰へ(左圓次)の重大夫好の駿よて出で(だん)を制る(だん)ハ、貴殿は倉橋重大夫どの何ゆゑ拘つて止め、さるト是よて重太夫ハ少ー存ずる子細もあれば貴殿ハ組子を連れて一先引あげられよといふこれにて(だん)の郷藏ハ組子を連れて向ふへはいる此時(左)の重大夫ハ(圓)の彌平次(紫)のお秀に是非とも御殿へあがれとすゝめる(紫)ハ紅裝の仇をのへそハ菊地太領の傍近く寄るこそよしといふ思ひいれあつて(紫)不束なる妾ーを夫ほどまでに御所望ハ身にも應せぬありがゑさ此上御辭退やすのも何やら心よすゝそませねば如何にも御殿へ上らうといふ(左)ハ是を聞いて喜ぶ(圓)ハ娘を御殿へ出す代りに貴公が兼て大望の一眛よ加へてくれろといふ(左)ハハット駭くこれより(圓)ハ前幕で拾ひし密書を出し(左)と暗闘ほどきの盞詞渡りト、(左)ハ菊地の家を兼ふ所存だと大望を明し(圓)の彌平次を味方よして五百石の侍ひよ取立ると(左、圓、紫)のわたり盞詞ある爰へ(新相中)一人狩人のこしらへ(圓)に切かゝる一寸立廻りとてその狩人を切る爰よて莊

(三幕目倉橋重太夫内の場)平舞盞渾て倉橋屋敷の体爰よ(新相中の)商人風の男種ゃなる品物を持て倉橋へ禮よ來るこの一群ハいると跡へ船大工作造の(荒次郎)向ふより出で重太夫へ一万石船の大船をしでかし御勘定方からお拂ひを頂ざいたゆゑお禮よ参りましさと禮物をならべる此時(左)の重太夫出て禮をいふ爰へ前幕の(圓)彌平次酩酊の体にて一升徳利を下て向ふより出門口へ來り旦那に逢ひたいといふ(新相中)ハソリヤまた來たといふ顔で今日ハれ留主だといふ(圓)は驚がしたから居るよ逢ひあーとズット這入(左)の顔を看るより着を出せとか金を貸せとか云て(左)を困らせる(左)ハ彌平次よ意見をーた上日外貸た一眛徒黨の連判狀を返ーてくれよといへど(圓)ハ禄よ返辭もせぬ其處へ寢てしまう(左)は人ゐさを幸ひといふ思ひ入拘つてトド(左)ハ切かける是よて(圓)は眼さまし双方氣味合の仕打あつて(圓)ハ(左)より金三十兩を借り締るこの時柱時辰チン〳〵鳴る折から御殿より喚よ來る(左)はドリヤ出仕致さうかと見得よく道具廻る(御殿諫言の場)本舞盞道具作は深て菊地淫殿の場爰よ(海老藏)の菊地貞行好みのこしらへ太守よて居る(左圓次)の倉橋重太夫出で(右圓次)の淺川主水(紫)のれ秀の方共他(相中)のこし元居あらぶ(海)は大船首尾よく製造したるも全く重太夫の功と讃めトゞ倉橋と淺川に加增しこれより其大船をたいものじやといふ(海)の貞行も倶〳〵往て見やうと立あがる爰へ花道の揭幕より(圓十郎)の鳥山大膳次上下好のこしらへ暫く〳〵と言あがら出る(海)の貞行見てヤア汝ハ長崎表へ出張させたる鳥山大膳何も云あつて歸國したトいふ(圓)の大膳ハ何ゆゑトハ情なしとこれより大船を製造たる其不都合を詰るト、(海)ハ憤て刀を拔き(圓)を切らんとする(圓)は此とき兜を出〳〵貞行の前よさし附け此兜は先代と此筋の盞詞よて貞行よ諫言する(海)の貞行ハ敢心の体よて早速大船ハ燒棄ンといひ倉橋淺川の兩人へハ遺慮を命ー又これにて(右、左)の兩人遺入あと(海)ハ盃を鳥山よ與へる(圓)の鳥山は其盃さを頂き乍ら淫酒を耽るもの、末は決して全からぢとそれとなく(紫)のれ秀の方よ投ていふ(紫)も仕打ある(圓)は酩酊の体よて立上る此とき後より曲者ハ見事よなげて此見得よろしく道具廻る(城外松原の場)道具物とべて筑紫城外松原の場爰へ(相

中）の武士大勢出で今日長崎より鳥山大膳が歸りーゆゑ我々の大望の邪魔よある奴あれバ歸りを待伏打殺さんと此樣ゑ臺詞あつて上下へ分れていれる爰へ（圓）の鳥山大膳登城歸りとのこーらへ下部の燈灯の火消る下部ハこれよて火を借て參り生せうと下手へはいる此時虫の音止（圓）の大膳不審の仕打爰へ（右）の淺川主水忍び姿好きのよしらへ（圓）の背後から切かける（圓）ハ始終扇にてあしらひト、白刀を打落さて組敷（圓）頭巾よ面を奪みしゆゑ瀧よそれとい知らねども今翁地家の浮内よて神影流の名人ハ淺川ならで他よなし渠ゑ素より忠義厚く奸臣倉橋に一味なそべき者ならねどト是より宜しく意見の臺詞ありて突放さ（右）の主水は後悔のこゑさありてしほ〳〵と向ふへハいる爰へ仲間灯を持て來る（右）ハ手裏劍をうつ提灯よ中りバッタリ落す（圓）さた消たか悪い風だト幕

（四幕目淺川主水切腹の場）造り物渾て家中屋敷の体爰よ（秀鶴）の小女郎世話女房の打扮（福助）の主水弟主計居りて（秀）今度製造よあつた大船を鳥山樣のれ計らひよて今日燒すてるトいふ筋の臺詞ある（福）の主計は何卒其燒ところを見たいものじやトいふ（秀）は兄さまのおるそでハあれど又とない船の燒打見てゞざるゞ宜からうといふこれよて（福）は出て向ふへ道入跡へ向ふより（右）の淺川主水しほ〳〵とーて歸る（秀）ハ主水の顔色の悪さを見て樂ゑる仕打（右）ハ今朝から氣分が悪けさバトこの樣な臺詞ある爰へ星野東右衛門方より（秀）を迎ひに來る（右）何事かしらねど行といふ是よて（秀）出て行跡に（右）ハ思樂の折から（左圓次）の兄星野東右衛門來り訪ふ（右）ハ内よ入れ子細を問ふよ（左）ハ懐中よ手裏劍を出し（左）弟コノ小柄ハ其方覺えゞ有ず（右）ヨ、其小柄が何も忘貴兄の（左）アノ玆な不忠者めと是より夕夜鳥山氏ゞト動静を語り倉橋へ一味ーたる後悔ゑさば責てハ武士らしく切腹せよトこれより此筋の臺詞ある（右）は全く金の爲めよ叛逆人に組せーを後悔し此うへは今夜暮六ッを合圖ふ切腹そるといふ（左）ハ心のこりのあき樣倉橋へ返濟せよと三百兩を渡し歸る跡へ（秀）の小女郎歸るこれより（右）は愛想づかーの臺詞ありて女房去ッた暇くれたといふこれよて（秀）嘆きさられる愛あいと爭ふ爰へ隣の細君來り（秀）をなだめ連て下手へ道入（右）ハ後よて科なき女房を去さといふハ不便やと臺詞ありて金よ添へる手紙を認ところへ（福）の弟歸る是よて手紙を持たせてやる一寸兄弟名殘の仕打あり（福）ハ案じゑから向ふへはいる折かふ時の鐘に（右）ハありやモウ暮六ット脇差を腹へ突立る爰へ（左）の星野（秀）の小女郎も出來り（秀）ハ取つきあげく（右）ハ忠義ゞ不忠とおつたといふ筋を物ゞたるトヽ（左）ゞ介錯する所よて道具廻る

（佐屋形山岩狩の場）本舞臺造り物渾て山中の体松原の書割よろーく爰へ（紫）のお秀の方與女中五百崎（しげ松）同く岩浪（喜知六）其他（相中大勢）與女中よて出來り今日岩がりとハよいれ慰さゑ日常喰たん〳〵と思ふて居る味のよさヽうな太さうあ氣味の悪さうなが取たいとこの樣ゑ臺詞ある（紫）は習よ遊んで來よゆるそといふ（相中）左やうあらゞお部家樣と（秀、しげ）の兩人を遣し上手へ行る跡よ（喜げ）ハ四邊を見廻し（紫）の傍へよ（ーげ）日外近火の節お物見に於て殿樣のお留主と幸ひに不義ゑされた事を知つて居るはこの五百崎一人なりしが其後も れ出合遊をすと見得今ハ一家中よても彼是と評判ゞあると承たまハりまさだゆゑそれでは貴婦濟ますまいと意見をする（紫）ハこれを聞き少さおどろいたる仕打よて其方の意見よしたがひ此後ハ左樣ゑ不義はせぬほどよ安心してくれよといふこれよて（喜げ）もよろこぶ思ひ入爰へ（喜知）の岩浪酒筒を持て出でこの景色にて一献あゞりませとヽめる（紫）ハ（しげ）よ呑めといふ（しげ）ハ一杯呑むと忽地苦しみ出し血を吐く（ーげ）さてハ今呑んゞ酒といふハ（紫）オ、毒樂ゞ（しげ）ヱ、（紫）大事を知つた事ゑればどうせ生ーておきはせぬトこのもやうよろしく道具廻る

（同山上只村殺の場）本舞臺すべて同山上の体裁ゑ（左）の只村と（國）の彌平次立かゝり居る（國）の彌平次ハ（左）よ向ひ何の密談か去らあいが一里も二里もある此山奥へ連て來ぜとも家でも密談ゑ出來やうよ然うしてまア何の用です（左）サア餘の儀にハあらざれどト是より其方の樣ゑ酒のみよも困るしまた度々無心をいハれるよ當惑するから今より禁酒をするか左もなくば二千兩の金をやるから縁て其方へ預け置し連判狀を返ゑて拙者の大望するまで暫らく國を立退てくれよといふ（國）なるほど然聞けば道理らーいゞ何程金を貰つたとてこの連判狀を其方へ返し其上爰を立退くやうゑソンな毒藥ハ出來チヘヨ（左）サゝ然思ふハ無理あらねとトこをより（左）ハいろ〳〵よ懐せぜ（國）ハ毫もきのすトゞ重太夫ハ憤つて（國）を一太刀切こをより立廻りになり（國）ハ懐中の連判狀を谷底へみけ返ゑモウこれで氣やそく死ぬノダと（左）の手に懸り死ぬるとまろよて幕

（大詰菊地家評定所の場）本舞臺淺草て本國菊地家評定所の体よろしく幕あくと麻上下の相中二人今日ハ鳥山大膳殿と倉橋重大夫殿の對決ゑとこの筋の臺詞わたる爰へ（國）の鳥山大膳（左）の倉橋重大夫（鶴）の茶道珍阿彌（喜知）の岩浪（だん）郷蔵等山で（海老）の菊地貞行正面よて（國）と（左）と對決よなる（國）の問ふ處（左）ハ悉々く辨解モト、是非なく大膳ハ連判狀を出す是よて（左）ハギョッとる仕打サア〳〵〳〵の詰合遂に（左）其他れ悪人恐を入る爰へお秀の方自害との注進來る（國）立上り必筑紫の甲斐あつてけふゞ目出度菊地の榮（海）ハテ目出度〳〵ふで拍子幕

第二番目狂言　劇鮮種偽籍

（序幕淺草奥山茶店の場）本舞臺淺草觀音本堂の後ろ銀杏の大樹此脇田茶屋總て奥山公園の道具爰よ（駒三郎）茶屋娘よて茶を出して居る床凡よ（竹次郎、橘次）書生のこしら（新相中三人）町人の仕出にて（皆々）奥山の菊を見よ

來ゑとの臺詞あつて左右ゑ這入後へ（喜知六）散髪羽織着流唐木屋の手代要助よて出る（駒三郎）の茶女にからかいのせりふ渡りある此時向ふより（松助）久平次の甥眼九郎商人風よ風呂敷包を背負ひ出て（喜知）の要助に詞をのけ同ゑ床机よあゝぶこれより（喜知）は私の主人唐木屋の次男ゑ前の伯父久平次さんの秘蔵娘お浦さんに極惚て是非郷よ行さいといつて居たところ法華信者の嵩の者長房幸次の媒人で和國屋の息子新三郎を郷よ貰つて初物をゞめられたを二男殿は悔しがつて元藍甲屋は唐木屋の支店の樣な見世よて隨分力よなつた事もあるから遠て縁を組ふといふに和國やの息子よ先をこされたが此頃きけば親子喧嘩の苦情が絶ぜ年中もめてゐるさうゞがなんと郷の新三郎を追出ーてい呉まいかトよろしく頼む（松）はこの話あら盤あふかもしれぬが新三郎ゞ郷よ來るとき千圓の持參金ゞあるから追ひ出せときよい其金を搗へて返さよやならぬからこゝハ大隠居が何といふかーれあい（喜知）そこハ心配をるよハ及ばぬ和國屋の息子が千圓の持參金なら唐木屋の息子ハ二千圓持つて行ませう（松）それじゃア向ふへ千圓返してまゞ千圓手許へ殘る譯ゆゑこりゃ相談か追ッつきませう（喜知）是をゞ成就すると澤山と禮金ハあるゞ（松）此節財政困難だから禮と聞いてハ骨を折ふと此節のせりふあつて茶代を世き兩人下手へはいる爰へ向ふより（清十郎改源之助）藍甲屋の娘お浦娘風島田かつら人形を抱て出る（秀調）下女おかん（國八）小僧三太供して出る（國八）おせうさんハ家橘の寫眞ばかり見てお出だト此せりふあつて舞臺へ來り（駒）其人形ハ何處でお買なされました（秀）これハ中店の花野で家橘よ似たのをお誂へあさいまーたトこれより（だん）れ小僧をかしみのせりふ渡る爰へ向ふより（家橘）藍甲屋の聟新三郎着流去羽織のふもり傘を持出來る（秀、源之助）大分遅ふござりましたな（家）其角堂ゞんつか咄した明光の掛物ゞ本阿彌の内へ來てゐるから夫を見て來たので遅くなった（國）内の若

旦那もお嬢さんも内へ歸るいんつでも嘘のつきッくら別々にお歸りゞト是れを明家橘思ひ入あつてお浦の母親が遂つて居るのら夫も名出入も別々よするトいふ(國)それもお袋さまが若旦那よ惚て居るのら燒餅をやくのだト此樣な臺詞渡り(源)ゝ富士見の奥二階でゆつくりと(家橋)皆々一所よいいる跡(駒)ゝ鼠甲屋と唐木屋が紛紜が起りさうだどやい、新聞ものだト此樣樣よろしく道具廻る(同く富士見二階の場)本舞臺淺草田甫富士見亭二階の道具下手よ段階子を見せ爰よ(菊之助)の富士見娘お玉(相中)の下婢客の歸つた跡の皿鉢を片づけてゐる爰へ(菊五郎)の法華の信者長房幸次爲人足のおしらへ珠數を首にかけ下より出來る(菊之助)オヤ頭ふ出でおさんましたか滅よふ珍らしい(菊)今日ハ田甫の清正公へ參詣よ來たので久し振で一寸飯を喰ひよ來たといふ(菊之)は相中と頭ハ何で長房と言升と聞く是よて(菊)ハおれは法華宗でこの珠數を首よ掛て放さぬ亦腕よ清正公の刺繍があるト朝鮮よ加藤を聞せた臺詞有てそれで長房の幸次と言のだと語る(菊之)頭も廓やこの邊へ度々お出なすつても宅へは毫も來て下さらない(菊)中々近頃多忙ッて薩張遊びとなーだ(菊之)さうでも有りまそまひ有難世新聞で何だがい、鼠が軽て居ましたヨ(菊)アいッア見られちやア閉口だ(菊之)ハ今日富本と岸澤の中直り淨るり會があるといふ(菊)は其イッア有難へ久しく富本の太夫よハ逢はなかつゝと是より豐前大夫を呼んで今度岸澤と和睦れ口上を(菊)がんひ十年ぶりのお目見得と云てやる爰へ淨るりよあり(家)の新三郎(源)のお浦(秀)下女(國八)ゐ小僧皆々來る(菊)是は〳〵新三郎さん皆一所よ遊びかといふ(家、源)兎角宅が治らぬので心配だといふ(菊)ハ何も心配する事ハるん此幸次ゞ媒介よ成て結納の取換せをしてゐはば條約も同じことそれを今さら解の止るのとうんゐ不條理ハいゝる者じやあいから心配をるゝと諭と爰へ田甫の清正公から講中ゞ逢ひたいと幸次を呼びよ來る是よて(菊)ハ下へをりる跡この一座で酒を飲んで居と座敷へバラ〳〵と石を投る(菊之)の娘ハ此邊よ悪戯お子ゞわつて困り升のふお座敷を代てとんふ是よて(家、源、國)の三人(菊之)が附き興へをいる跡よ(秀)のおかん殘り大隠居久平次の米開よも困ると一人言ある爰へ(松助)の眼九郎徐と出で突然おかんよ抱付是よりおれのいふ事よ隨がへゞ今よ金の百圓も儲かるといふ(秀)はどうしてお前かそんなよ儲かるのだと聞く(松)は品川町唐木屋の二番息子を貰へば二千圓の持參金ッコでアノ新三郎ハ追ひ出すとての筋の臺詞ありてこれよて(秀)ハおどろき振ハるーて奥へ遁て這入る爰へ(喜知六)の番頭出ていよ〳〵新三郎を追ひ出す一件承知かといふ(松)ハ飲込だ〳〵と是より兩人互ひに悪策を相談ーて居る此時上手の障子を明(家)の新三郎とれを立聞き其處へ出る(家)何ざう儲け仕事らしいが己も一口のせて呉ろと言是よて兩人驚ろき(松、喜知)そんなら今の動靜をば(家)サア聞いたでもあー(兩人)エ、(家)聞のんでも無サトこの摸樣よろ〳〵道具廻る(大川端石橋場の場)渾て大川端石橋場夜の道具よろしく爰へ二三人の相中いづれも職人体よて出で(相中)此邊よ素的な地獄ゞ出るとの事だが見さかといふ(相中)ゐりやア何でも一通りの地獄じや有めいト此筋れ渡りきりふあり て皆々上手へは入跡向ふより(菊五郎)の長五郎女房お かね切つぎ貧乏女房の形よて出でた今夜も稼ゞうと捨せりふゐりて舞臺へ來る爰へ(新太郎)老人の疝へ商人よて出で通り過ぎるをモ〳〵ト(菊)が呼び妾しい何某といふ士族の女房ト是より零落の愁嘆唄しゐる(新)ハそれハ憫然る者だと錢入から十錢紙幣一枚をやり上手へ這いる跡(菊)と十錢札を見て(菊)何だつまらぬへ十錢かト爰よて傳法肌悪婆の仕打爰へ向ふより(猿十郎)町人の形よて出る(菊)是を見てア、痛い〳〵と癇を起と(猿)ハ堂ーた〳〵と傍へよる(菊)ハ憚なゞら貴郎とうざて、の處を押へて呉ろといふ(猿)傍へ行き腹へ掌を入れ撫でる(菊)

色身の臺詞あつて(猿十郎)の手をジット握る猿はをかしみの形ある爰へ向ふより(左團次)の暴徒半目の長五郎破落戸の拵へにて出でしあだれて居る(猿)を投るこれにて(猿)路く(左)い己の眼ァを何とそるのだト櫨幕に驚きみげる處を(猿)が懷中へ手を入れ紙入を抜く此間ゑ(猿)ハ逃て這入(左、菊)と中を改る一圓五十錢位る馬鹿〳〵しいこれッ計しや引合ないト是より(菊左)ハ京屋ふもと居た鹽甲職人仕事が嫌ひ故こんな事をして遊ンで暮そのだと渡りせりふある爰へ(家)の新三郎來るこれにて(左)は後へ隠る(菊)のおのねそまた癇の起る仕打よて新三郎ゑ押へて呉よといふ(家)は女一人だから若い男の私とおさへる事は出來ぬと懷中のら藥を出してやり今巡査を呼で來てあげやうとんふ此時火入の月を隠し三人世話だんまりゑあるこゝへ(左)出でゝ(家)ゑ突當り世話だんまりに成トゞ新三郎は藥入を落す是を(左)の長五郎が拾ふこの引張宜しく幕

(淺草門跡前甘酒屋の場)本舞臺淺草門跡前甘酒屋が店の休爰に(新相中)仕出を二三人甘酒を呑み藥てせりふあり て下手へはいる爰へ(仲藏)ゐ鹽甲屋大隠居久平次頑固爺の拵へチョン髷花道から來る後のら(松)の眼九郎 オイ〳〵伯父さん〳〵と云ひながら呼び掛て來る(仲)立止り何の用がゐるかといふ(松)いゝ話があれどこゝじやァ言悪ひ何處で話さう奴鰻へでも行うといふ(仲)は鎧ぼうメ奴鰻はロハじやねへぞ夫よりやァ門跡前の甘酒屋が能と兩人舞臺へ來たり甘酒屋の床机ゑ腰を掛るこれより(松)ハ前幕の(喜知)が話た一件をいふ(仲)ハ祝ゑ併新三郎を追出す工夫ゑ困るといふ爰へ(菊五郎)のおのね葵登の蔭のら出て(菊)旦那樣お久しぶりトいふ(仲)お前ゑ長五郎のお内儀おかねさんお前の處の長さんハ職業も上手だが酒を呑で身持の悪いゑハ困るとこの樣お臺詞ある(菊)は新三郎を追ひ出す工夫ゲあるとんふ(仲、松)よろゞび何うして離縁ゲ出來るかと問ふ(菊)ハ兩人の耳ゑ口

してさゝやく(仲、松)ナアル程妙々とよろこぶ(松)ハ(仲)ゑ茶代を置けとんふ文久一ッ置く(松)ゑ困るこの樣お客嗇お仕打せりふ渡りありてトゞ一錢銅貨を置き(仲、松)兩人ゑ下手へ這いる(菊)は昨宵の臥れでそつゝり癇込だが幸ひでいゝ儲け口ゑ有附た俗ゑいふ果報ハ寝て待てだらうと懷中から十錢札を出し茶代ゑ置く茶店女一人て十錢置くお方もあれば二人で一錢のお客もあり(菊)十一錢ゑありやァチョイをそるより制だァテヘトこの樣よろ〳〵道具廻る

(陸尺長屋鹽甲屋京屋の場)本舞臺鹽甲屋店の道具爰ゑ(橘次、升藏)ゑ鹽甲職人仕事して居る(團八)の小僧磨き物を爲て居る皆々家の大隠居ゐ頑固ゑも困るがお袋ゲ養子の新三郎ゑ惚れてアノ皺面へベタ〳〵白粉ゑ賣ゑ恐れるト此樣なせりふ渡りある爰へ奥より(仲藏)の久平次出來り(仲)話をそるだけ職業をするがいゝト小言をいふ爰へ(團右衛門)か久平次女房おかま年寄女房の拵へ出て職人三人食事だといつて奥へはいる跡ざん)ハ新三郎の歸らないハ亦女ゑでも引ぱられて居るゐで有らうと氣を揉む仕打爰へ(家)の新三郎前幕の形ゑて歸り宅へはいる(仲)の久平次兎角其方が唐人くさい真似をするので困るとこの樣お臺詞ある爰へ向ふよりこ(菊五郎)のおのね前幕の形で出で内を覗さはいる此時(左團次)の長五郎四五人の落破戸を連れ出て小蔭へ隠れる(菊)ハ(家)ゑ旦那昨夜んハ有がたうお約束だから參りましようといふ(家)ハお前は昨夜大川端で癇ゑ苦んで居たお内儀さん然うして約束〳〵と云ッしやるハこれゑて(菊)ハ思ひ入あつて(菊)若旦那おとぼけなすつちやァいゝませんよ始そチョイで十錢の露の情が三四度五十錢から段〳〵ト地獄のせりふ後つて夫婦約束をして証據ゑこれをお呉なすつたのだと前幕で拾つた藥入を出しゆすりになる(仲、だん)ゑ憤り地獄ゑ馴染をこさへる樣お奴ハ宅ゑおけぬとんふ爰へ(左)の長五郎飛込(菊)を捕へウヌ太い阿魔だト打擲そるサア旦那何するンですトゆそる爰へ(門藏)の家主二兵衛出て仲裁そるこの時暴徒石を投荒る(秀、源)も出で俱々詫氣をもむ(仲)の久平次郵便端書を紙ゑ包百圓と認めこれを以て歸つて呉ろとおのねゑ渡す(菊)ハ(左)とせりふあつ

て今日はこのまゝ歸らうと暴徒四人を連れ皆々向ふへはいる跡(仲)の久平次(家)よ出て行とんふ(ざん)ゝ是だから常々私のいふ事を聞ておけば斯んな事ゝ出來ないとんふトゞ(家)を追ひ出せ跡(仲)は新三郎を追ひ出した上は己は元乃主個と成から先いえゝ鼈甲屋の國王樣だ第一新三郎のそる事に碌な事ゝない淺草よは觀音の鐘があつて時が分るものを時計を買たり亦日和傘も雨傘もあるのに蝙蝠傘だのト見るさへ忌々しい疾くアンな物は取除て是唐他人交際をやめ店を締をして持參金の鐚を貰よやなゝぬと當世のきかせ臺詞ある爰へ奥より(橘、升、國八)出てサア〳〵大變お嬢さんはおかんどんを連れて裏口から何處へ逃さつしやつたといふ(仲、だん)駭きゝッア大變だ疾く手をわけて搜せ〳〵トこの騷ぎ摸樣よて道具廻る(濱町川岸富士見渡の場)本舞臺濱町川岸富士見渡し夜の道具爰よ(新相中)渡ー守よて居る(相中)この渡しえ水天宮か何ぞでなくサヤア平常ゝ淋くて爲のたがゝい今夜もゝう早歸りだとこのせりふ迄て船を仕舞もやうゝりて下手へはいる爰へ(松)の眼九郎先棒よて職人大勢出る(

松)此位探しても知れないのはモシどんぶりやつたので有まいか何ぞろ搜そよも腹が減てえならないから大橋へ往つて飯でも喫えふと皆々ついて上手へ這入爰へ(家)の新三郎凋々出て(家)思ひがけない汚名をうけ追出されたる口惜さ日本橋の幸次殿の宅へ行きこの一件を話たらへよて釜屋堀の内へ歸らうとこの樣な臺詞あつて舞臺へかゝる爰へ(源)のおうふ(秀)のかかん出て(家)の跡を慕つて來さかそれから幸次どの、處へ行うといふ爰へ(國八)の小僧出て大橋の方へ往チヤアいけない追人が居るといふ是よて(家)と(源、秀)一緒よある爰へ(松)の眼九郎出るこれよて(家)は(秀、源)を連れ渡ー船に乘り逃る(松)そしさりよ石をあげる(家)は棹を流し餘儀なく板子よて漕(國)の小僧(松)をさゝへるとのしをの摸樣よて幕(鼈甲屋店の場)本舞臺すべて前の鼈甲屋の道具爰よ職人大勢居てお嬢さんを搜したゞ知れないから歸つたとこのせりふ迄りて奥へ行爰へ(喜知)の唐木屋番頭要助出て内へはいる奥より(仲)の久平次出て(喜知)ゝ兼て約束の鐚入を早々話を取極たい夫よ付て明日結納を取替ーたい納

と則ち條約ですといふ(仲)は其條約をそるようしては持參金の内千圓だけ前へ貰ひ度といふ(喜知)と結納が極りさへすれば二千圓直よお渡しヤ升が何よしろお浦さんよ一寸お目よかゝらうといふ(仲)は氣を揉む仕打娘と今少し用足よと頓沈濕ゝ事をいふ(喜知)はお浦さんは家出ざらうといふこれよてもう聟入はこれ限だと言て向ふへ這入(仲)ゝ品川町よ見限られチヤア已の家が立行あいト支那のヤカせ臺詞ある是へ(左)半目の長五郎(弼)おのね向ふより出て内へ入る(仲)は何にしよお出なすつゝといふ(左、弼)は昨日のお祝を貰ひよ來やしたと郵便切手の包を出そこれよて(仲)は是非ない仕打で五圓紙幣二枚をたす(弼)は百圓のうち一文かけても承知しねへとゆする(仲)馬鹿〳〵い勝手にしろといふ爰へ(門蘭)の大屋出て(仲)おお前もこれ内の隠居で居た頃ゝよけれと今は再び主個だのらト此樣あせりふあつて仲裁よ入る(仲)は十五圓からシリ〳〵上るトゞ百圓のうち五十圓當金渡を殘り五十圓ゝ毎月五圓づゝ十ケ月賦よやるといふ條約のキカせこれにて(左、弼)ゝ承知して歸る(仲)ゝ品川町よ捨

られナサア困るからこりゃ一思案せにやアならないとて
の摸樣よろしく道具廻る
（日本橋長房幸次内乃場）本舞臺日本橋幸次内の場道具都
而消防人夫家の体愛は（家）の新三郎（源）のおくら（秀）の
おのん居る子分大勢並ぶ（源）はこの騒きよなりたも妾か
ら起のた事故と自害せうとする（菊）の幸次とめ何でもこ
の狂言は半目の長五おかねの兩人ゞ謀計だといふ子分い
是唐揃ッて陸尺長屋へ押かゞぶつ、ぶせといづれもりさ
ゞ仕打（菊）いさは〳〵するよやァ及ばねへ己一人往て形
を付ると子分を制めるあの摸樣よて道具廻る
（幽甲屋店の場）本舞臺渾て以前の幽甲屋の場の道具愛よ
（仲）の久平次居る愛へ（菊）乃幸次來り私が媒介よあつて
大和屋から婆子よ貰つた新三郎をどうした科かい不知が
離別とるなら何故一應私よ引合をしあさらあいのだサア
持參の千圓今返すかサモあくも惜れ通り新三郎を婆子よ
しろとサア〳〵の談判になる愛へ（海老藏）の馬頭師忠右
衛門好の拵へよて出で來り（海）この一件は何ゞなんても
お前が恐いよ相違ないから元々の通り新三郎を迎へ幸次
よ詫狀出すがいゝ何が何まで未開よも大体度の伝るもの
だぜト（仲）を諭しそのチョン髷を断て仕舞といふ（菊）は
いやなら金を今返せといふサア〳〵〳〵の押合よ終り

（仲）い汗をのいて附まげの油が流れ思はずチョン髷の落
る仕打これにて（仲）と（海）の馬忠の順み髷の通り新三郎
を相續人よして幸次よ詫狀を出そといふ（海）いみれで幽
甲屋も繁昌するとこのせりふ渡り道具廻る
（大詰浅草橋の場）本舞臺渾て浅草橋の道具郵便局杯あり
夜るの摸樣愛へ（左）の半目の長五郎出る破落戸四人附て
出る（左）は此間幽甲屋でゆすつた事が耳にありおのねと
二局へ送られさか手前達も暫らく飛ぶがいゝトこのせり
ふありて金をやろ（相中）四人いこれを貰ひはいる後へ（
菊）の長房幸次出でおれより（左）と酷甲屋の一件を渡り
せりふよありトゞ兩人の立廻りとある愛へ破落戸四人縛
られ出る（左）は是をみておどろく愛へ幸次の子分今新三
郎お浦を京屋へ送り屆けさと言是よて（左）の長五郎も縄
にのゝるト後の黒幕を切て落す兩國橋夜の景遠見火入よ
ある（菊）い所も名よ應ふ兩國の睦みい破れぬ和解の花ゞ
さトあの摸樣宜しく引張よて幕
（大切矢の根五郎）本舞臺正面の障子かへ一臺ゆり大薩摩
よて此障子退ると（四十郎）の五郎ねる此傍前へせと出そ
大矢乃根を持てつらねある又大薩摩よなる愛へ花道より
馬士裸馬よ大根を乗せくる五郎あの馬士を張倒し大根一
把を携へ馬に乗これより大磯へッレーと大拍子よて見得
よく引張り宜しくなつて（打出し〳〵）